

[論文要旨]

芸術作品に作者の想いはどのように宿り、人々に記憶されていくのか

美術研究科 美術専攻 ガラス造形研究室 後期博士課程3年 鈴木茜理

筆者はこれまで工業製品と工芸素材の関係性や、工業製品と自然物の関係性などを作品のテーマとして扱ってきました。そして工芸素材で作品を制作する内に、次第と物にまつわる使用者の記憶の在処がどこなのか、人と物の記憶に焦点を当てた作品を創るようになったことを経て、次第に芸術作品に宿る第6感について推考するようになります。

過去作「物に宿る記憶とわたしたちについて」では、“人に使われ捨てられたもの”と“工業製品”、そしてその“工業製品をガラスにつくり替えた工芸的な作品”を一つの作品のなかで使用する、インスタレーション作品を発表しています。この作品では人が使用していた物に対する、想いと記憶は捨てられた後どこへ行くのか、物自体に宿っているのか、それとも使っていた人の心に刻まれ記憶されるのか、といった疑問を三つの形態の“もの”を作品の中で対比することで問いかけています。

芸術作品は長い歴史の中で人々に評価され、保存されていきます。そして芸術作品と同じように宝石と金もまた、これまでの歴史のなかで人々に評価され価値の高いものとして扱われてきました。本論文の第1章1.1 - 1.1.3節では、宝石と金に焦点を当てて取り上げています。

宝石や金といった素材がこれまでの歴史の中で人々にどのように扱われてきたのか。過去の歴史的な事柄を例に挙げ、素材の魅力について考察していきます。1.3節では、日本に古くからある樹石信仰と磐座信仰を例に挙げ、霊力の宿った祟りをなす流木や、巨大な岩を神仏にし崇めてきた出来事から、どのように信仰対象となる像が生まれていくのか探っていきます。そして「芸術作品に想いは宿るのか」という問いのもとに、仏教の仏像がつけられる過程の魂入れを例に挙げます。

そもそも仏教はインドで生まれたゴータマ・シッダールタが悟りを開き、シッダールタの死後弟子がその教えを広めたとされています。仏像の魂入れは開眼供養とも言われており、仏師が製作した仏像は完成したときにはまだ信仰の対象とはならず、その時点ではただの木彫りの像です。しかし、そこに魂入れの儀式を行うことで、信仰対象が宿るとされ、信仰の対象となります。では、芸術作品もただ作者が制作するのではなく、強く想いを込めながら制作することで作品に作者の気持ちが宿り、後世に残るような作品になり得るのでしょうか。信仰物がいつから信仰対象が宿るとされているのか、芸術作品の創られ方と比較していきます。

第1章1.5 - 1.7節では、マスターピースはどのようにして決まるのか、靈威性のある作品を例に挙げます。実際に芸術作品を制作している現代美術家達の発言から、作品における第六感の必要性を推考します。

芸術作品を観て人はどう感じているのでしょうか。左右対称や回転対称性、黄金比を有しているものは美しいとされています。そして人は、絵画をみて美しさを感じている時に脳にある前頭眼窩皮質と呼ばれる部位が活動を高め、醜いと感じる時には左脳の感覚運動野が活動を高めることが分かっています。第2章では芸術作品を鑑賞するとき起こる感情や脳の働きから、芸術作品と鑑賞者の関係をピート・モンドリアンの作品を例に挙げながら紐解きます。そして2.1節と2.5節

では修士課程の卒業展提出作品の壁掛け作品と、それに関連し筆者が影響を受けたマーク・ロスコの絵画作品について記します。

第3章では博士展提出作品のである5作品について記述します。筆者がドイツ留学中に制作した版画作品「Untitled」、修士課程から制作を続けているシリーズ「組み合わせられた物体 14」、ガラス作品の「層を重ねる 1」「層を重ねる 2」「層を重ねる 3」について題目と関連させながら述べていきます。